

村上篤直著「評伝 小室直樹(下)—現実はやがて私に追いつくであろう—」ミネルヴァ書房 2018年9月20日刊を読む

いい本は最低限10回は読みなさい

1. 島地や佐藤は、小室と親しく接して、小室から発想の仕方、勉強の仕方を肌身で教わった。
2. (1)あるとき、参考資料とした、福田^{ふくだかんいち}歆一『政治学史』(東京大学出版会)が絶版となっていることがわかった。それを知って、小室は夫人に、こう話している。
「あー、そうか、絶版か。あと10冊買っておけばよかったね」
「そうでしたね」
佐藤が口を挟む。
「え？先生、10冊買って、どうするんですか」
「佐藤君、くだらない本10冊読むよりは、大事な本を10冊買って、100回読んだ方が勉強になるんだよ」
島地も同じ話を小室から聞いたことがあった。
(2)「いい本は、最低限10回は読みなさい。君らがいつまでたっても頭がよくなるのは、だからだ」
そんな冗談を言った。
(3)「凡庸なのは、たった1回しか読まないからだ」
小室はそういいたかった。
また、佐藤は、小室の本の読み方を、^{かたわ}傍らで見っていた。
3. (1)1回目、赤いマーカーで線を引く。2回目、黄色いマーカーで線を引く。3回目、青いマーカーで線を引く。それで、線を引くところがなくなったら、新しい本を買う。それを繰り返していた。
(2)島地は、小室が、シュテファン・ツヴァイク『人類の星の時間』(みすず書房)を読んでいるのをみている。
この短編集の中で、小室が好きだったのは「エルドラード(黄金郷)の発見」。小室は、そこに権利というもの、所有権というものの実際の姿、もろく、はかない姿を、社会科学的な目でみてとっていたのである。
(3)ドイツ語でも読んだ。30回は読んだ、と小室がいうのを島地は聞いている。
実際、小室はその内容を完璧に覚えていた。
島地は、小室から「キミはどれが一番好きなのか？」と聞かれて、「南極探検の闘い—スコット大佐」と答えると、「ふーん…」という顔をしていた。

P546～547

<コメント>

本は何回読んだらよいのかという問いに、小室直樹先生は「いい本は最低限10回は読みなさい」と答えた。名回答だと思う。

2018年10月25日(木)